セウェルス朝と属州ブリタンニア

脊　戸　里　央

はじめに

192年12月31日に時の皇帝コンモドゥスが殺害されたことに端を発したローマ皇帝位争いは、翌193年には帝国全体を巻き込んだ内乱へと発展した。所謂「193年の内乱」である。その後この内乱は、当時属州上パンノニアの総督であったセプティミウス・セウェルスのいち早いローマ入城と皇帝即位、さらにはライバルであった属州シリア総督ペスケンニウス・ニゲルへの勝利したことで一旦の終息を見せた。しかし、この内乱において、皇帝位を狙える立場にいながらも、セウェルスの後継者（カエサル）に留まっていた属州ブリタンニア総督クロディウス・アルビヌスはその後、セウェルスが自身の息子であるカラカラをカエサルとしたことで、皇帝になる道を閉ざされてしまう。それ故アルビヌスはブリタンニアの地にて配下の軍団から皇帝にと宣言され、197年にはセウェルスとの決戦に挑んだ。この戦いにセウェルスが勝利し、「193年の内乱」は真に終結を迎えることとなった。

拙稿「コンモドゥス帝期ブリタンニアにおける皇帝擁立」（『西洋史学論集』51号、17－32頁、2014年）では、コンモドゥス治世にブリタンニアで起きた駐屯軍による皇帝擁立未遂事件を検討した。その結果２世紀末のブリタンニア駐屯軍では、ローマ中央に対する反抗心が渦巻いており、それが結果として193年の内乱時におけるアルビヌスの皇帝擁立に結びついたことを明らかにした。さらに論文末では、アルビヌスに勝利したセウェルスが、自身の晩年である208年からブリテン島北方の未征服地へと軍事遠征を開始したことを取り上げた。そしてその遠征の背景には、コンモドゥス治世から続くブリタンニア駐屯軍の反ローマ的感情を、北方での遠征に向けさせることで解消させ、この属州における不安定要因を取り除こうとしたことがあった、つまりはセウェルスの遠征により、属州ブリタンニアがローマ中央によって不安定要素ではなくなっ

たのではないかとの展望を示した。

そこで、本論ではこの視点をさらに追求し、セウェルスのブリタンニア遠征がローマ帝国のブリタンニア統治において、いかなる意義をもったのかを論じ、３世紀初頭のブリタンニアがローマ中央にとってどのように位置づけられていたのかを考察する。

第１章　セプティミウス・セウェルスのブリタンニア遠征

まず、セウェルス朝初期、すなわち２世紀末から３世紀初頭のブリタンニアに関する史料状況を説明しておく。この時代のブリタンニアについて述べている文献は少ないが、信用のおけるものとして同時代に元老院議員であったカッシウス・ディオが書き記した『ローマ史』がある。ディオはコンモドゥス治世から元老院議員として活動し、セウェルスの治世にはコンスルに就任した経歴を持つ。しかし彼の書いた『ローマ史』はその多くが散逸しており、本論で扱う記述に関しても11世紀に要約されたものである。セウェルスの行ったブリタンニア遠征に関しては、その行程が比較的詳細に記述されている。一方で、遠征より後の時代に関しては、ディオの記述の中にブリタンニアが登場することはほとんどなくなる。また、ヘロディアヌスの『マルクス帝没後のローマ史』にもこの時代のブリタンニアに関しての言及がある。ヘロディアヌスの出自に関しては不明な点が多いが、３世紀の東方出身の人物であったとされる。その記述には誤りが多く、信憑性の面で問題がある[1)]。さらにアエリウス・スパルティアヌス他６名の著者による皇帝の伝記集であるとされている『ローマ皇帝群像（ヒストリア・アウグスタ）』は、時代を下るにつれて記述には誤りが多くなり、セウェルス治世のブリタンニアを知る史料としてはほぼ使用できない[2)]。ブリテン島から出土する碑文もローマン・ブリテン研究では貴重な史料であるが、３世紀に入ると、出土碑文が格段に少なくなり、属州ブリタンニアの詳細を知ることは難しい[3)]。

１）南川高志、桑山由文、井上文則「ローマ皇帝群像解題」『ローマ皇帝群像４』（京都大学学術出版会、2014年）、251－321頁。

２）A. R. Birley, *Septimius Severus: The African Emperor,* London and New York, 2nd ed., 1988, p. 182.

３）大清水によれば３世紀には帝国西部の碑文が減少し、ブリタンニアでも都市に関する碑文は皆無である。大清水裕『ディオクレティアヌス時代のローマ帝国

以上の様な史料状況の中で、セウェルスのブリタンニア遠征に関する先行研究ではディオとヘロディアヌスの記述を摺り合わせる形で議論が行なわれている。しかし後に詳しく述べるが、二つの記述にはセウェルスがブリタンニア遠征に至った動機に関して若干の違いがあるものの、そのほかに関しては大きな差異がなく、かつ他の一次史料上にブリタンニア遠征への詳細な言及がないことから、議論が発展しにくくなっている。

次に、セウェルスのブリタンニア遠征に関する研究状況を簡単に整理しておく。かつてセプティミウス・セウェルスに対しては、「軍人皇帝」の先駆けであるという認識がなされてきた。この通説的理解は、A. R. バーリーの伝記的研究を始めとして再評価がなされ、現代では彼に対する評価は見直されつつある[4)]。わが国でも南川高志が自身の論考の中で詳細に論じている[5)]。この論考において南川はこれまでの先行研究におけるセウェルス像の移り変わりを押さえた上で、セウェルスの行った政策を丹念に見ていき、その多くが当時のローマの情勢に即したものであり、内実を見ると、むしろマルクス・アウレリウス帝と似通った政策を取っていたとしている。これらの研究以降、セウェルス朝についての再評価は進み、研究は盛んに行われているが、上記の一次史料の問題も加わって、ブリタンニア遠征に関しては本格的に議論されておらず、概説的な説明に留まっている。セウェルスの伝記的研究を発表し、ローマン・ブリテン研究の第一人者であるバーリーが、自身の著書の中で遠征に関して比較的詳しく述べている程度である[6)]。

続いて、アルビヌスの皇帝宣言からセウェルスの遠征に至るまでのブリタンニアの情勢を確認しておく。197年、セウェルスとの決戦に挑むため、総督であったアルビヌスはブリタンニア駐屯軍3個軍団を引き連れ、海を渡ったとされている。この事でブリタンニアは総督及び駐屯軍が不在の状況となった。国境の警備も手薄となり、北方民族のローマ領

ラテン碑文に見る帝国統治の継続と変容』（山川出版、2012年）、202頁。

4）Birley, *Septimius Severus.*

5）南川高志「セプティミウス・セウェールスとローマ元首政」『史林』65－2（1982年）、280－315頁。

6）Birley, *The Roman Government of Britain*, Oxford, 2005; Birley, *Septimius Severus.*

土内への侵入を招いたのである。当時のブリテン島における、ローマ領とそれ以北を隔てる国境は「ハドリアヌスの長城」であった。「ハドリアヌスの長城」は122年からおよそ10年の歳月をかけて建設され、ブリテン島において、ローマ領と北方民族との境界線として機能したと考えられている。140年代にはスコットランド中央を横切る形で「アントニヌスの長城」が建設され、その後20年近く国境としての役割を果たした。その後「アントニヌスの長城」は160年代に放棄され、セウェルスの治世下では再び「ハドリアヌスの長城」が国境線となっていた[7)]。

アルビヌスが敗れた後、セウェルスによってブリタンニア総督に任命されたウィリウス・ルプスが現地に着任した時には、「アントニヌスの長城」北部に居住していたマエアタエ族が、ローマ領を脅かし、さらには北方の高地地方に居住するカレドニイ族と手を組もうとしていた[8)]。ディオの記述からは、ルプスがマエアタエ族に対し金銭を支払うことでローマ人の捕虜を解放させたことがわかっている[9)]。ただしこの時期のブリタンニア総督に関しては文献史料に言及がないことはもちろん、関連碑文史料も少なく、ルプスがいつ頃までブリタンニア総督職に就いていたのか明確ではない。彼の後任も誰だったのかははっきりとしないが、おそらくウァレリウス・プデンスだと考えられている[10)]。さらにその後任として205年にアルフェヌス・セネキオが総督に任命された。セネキオはイングランド北部出土の碑文の中で、他の総督より比較的多くその名を見つけることができる[11)]。彼に言及した９つの碑文の内、４つが国

7）マイケル・フルフォード「新たな出発――ボウディッカの敗北から3世紀まで」、ピーター・サルウェイ編、鶴島博和日本語版監修、南川高志監訳『ブリテン諸島の歴史　1』（慶應義塾大学出版会、2011年）、90－91頁。

8）バーリーはペナイン山脈のブリガンテス族が反乱を起こした可能性も示唆している。Birley, *Septimius Severus*, p. 171.

9）当時セウェルスは他の地域での戦争（おそらくパルティア戦争）に専念していたため手が離せず、ルプスは金銭の支払いに応じたとされている。Cassius Dio. 75（76）. 5. 4.

10）ウィリウス・ルプスの総督在任期間に関しBirleyは、証拠となる史料が不足しているものの、203年頃に総督職を離れたと仮定している。またルプスとウァレリウス・プデンスの間にもう一人総督がいたのではないかとも推測している。Birley, *Septimius Severus*, pp. 183－186；またMennenは、ルプス及びプデンスが193年の内乱においてセウェルスを支持していたとしている。それ故のブリタンニア総督への任命であったと考えられる。I. Mennen, *Power and Status in the Roman Empire; AD 193－284*, Leiden and Boston, 2011, p. 208.

11）Birley, *Government*, p. 190.

境の後背地から、さらに４つが「ハドリアヌスの長城」沿いの要塞から、１つが長城より北に延びる前哨地近くで発見されているが、建造物に関するものがほとんどである[12)]。その理由としては、セネキオが総督時に「ハドリアヌスの長城」の再建を行い、さらには長城の後背地での基地再建も行なったことが挙げられる[13)]。加えてバーリーは、セネキオと、当時ブリタンニアへ派遣されていたプロクラトルであるオクラティヌス・アドウェントゥスの二人が、共に建設事業に従事していることにも着目している。バーリーによれば総督と、総督の監視的役割の一面も持つプロクラトルが共に活動することは珍しく、アドウェントゥスは軍の諜報機関に属し、国境や北方民族の情報を収集するためにブリタンニアへと派遣された可能性があったというのだ[14)]。またセネキオに関する碑文史料からは、彼がローマ属州内に侵入してきた北方民族を撃退するだけでなく、ローマの領域外に進軍し戦闘を行ったこともわかっている[15)]。このように、ブリタンニアがローマ属州になって150年近くが経っていたが、ブリテン島の北部ではローマと原住民との争いが続いていた[16)]。

そのような中、208年にセウェルスのブリタンニア遠征が開始される。この遠征はセウェルスの二人の息子であるカラカラとゲタを伴って行われた。M. フルフォードによればブリタンニア内の３個軍団のみならず、ゲルマニアやパンノニアそしてモエシアからの艦隊がブリタンニア艦隊に加わっており、遠征の規模としてはかなり大きなものであった[17)]。遠征時の総督はおそらくファウスティアヌス・ポストゥミアヌスであったと考えられているが、断定できるだけの証拠はなく確実なことは言えな

12）Birley, *Septimius Severus*, p. 170. *RIB* 722; 723; 740; 746; 1243+add.; 1337+add.; 1462; 1909; ? Britannia 8（1977）432, no. 25.

13）フルフォード「新たな出発」92頁

14）Birley, *Septimius Severus*, p. 171.

15）「ハドリアヌスの長城」沿いのCondercum（Benwell）では、この地に駐屯していたアストリア人の騎兵連隊によって『皇帝の勝利のために捧げられた』祭壇に、コンスルとしてアルフェヌス・セネキオの名が挙げられている。A. R. Birley, *Septimius Severus*, p. 172.

16）Mennenはセネキオがセウェルスのブリタンニア遠征の準備を始めた総督である可能性を示唆している。さらにセネキオの経歴には不明な点が多いとしながらも、パルティア戦争においてセウェルスに仕えていたであろうと論じている。Menner, p. 203.

17）フルフォード「新たな出発」94頁。

い[18]。

先述したように当時のブリタンニアにおけるローマ領とそれ以北の国境線は「ハドリアヌスの長城」でほぼ定まっていたが、セウェルスはさらにその先にと進軍していった。彼が長男カラカラと遠征に赴いていた間は、ゲタが南部のローマ領にて司法業務などを担当していた[19]。セウェルスがブリテン島に滞在していたのは208年から死去する211年までだが、その間、2度に渡って北方へ攻撃を仕掛けている。一度目は209年であり、「ハドリアヌスの長城」のみならず、「アントニヌスの長城」を越えての軍事活動が行なわれた。ディオによればローマ側の被害も大きかったようであるが、セウェルスは軍を進め、カレドニアの部族に対し、領土の半分を放棄させるという協定を結ぶに至った[20]。この成功によってセウェルスと二人の息子は210年に「ブリタンニアの大征服者」(Britannicus Maximus) の称号を得ている[21]。その後再び北方民族が反抗を示したために、210年、2度目の攻撃が行なわれた。この時セウェルスは病で動けず、軍の指揮はカラカラが行なっていたと考えられている[22]。その後セウェルスは病の悪化から211年2月に死去し、遠征は終わりを迎えた。セウェルスの死後、カラカラは北方部族と再協定を結び、ブリタンニアを去る。なおセウェルスは島の北端に至ったとされているが、それがどの地点までかということに関しては正確なことがわかっていない[23]。

18）ポストゥミアヌスがセウェルス及びカラカラの治世のどこかの時点でブリタンニア総督であったことは確かである。Birley, *Government*, pp. 192－194.

19）Herodianus, 3. 14. 9.　ゲタは常に南部にいたわけではなく、少なくとも208年には、セウェルスが国境を調査している間、カラカラと共にエボラクム（現ヨーク）にて帝国の業務にあたっていたことがわかっている　Birley, *Septimius Severus*, p. 180.

20）信憑性は定かではないが、ディオは戦闘によって5,000人のローマ兵が戦死したと書いている。Dio, 76（77）. 13. 2.

21）Matthäus Heil, On the Date of the Title Britannicus Maximus of Septimius Severus and His Sons, *Britannia*, 34,（2003）, pp. 268－271.

22）ディオによれば、再反乱を知ったセウェルスは兵士に、出会う者すべてを皆殺しにするように命じ、自身が遠征する準備も行なっていたが死去した。Dio, 76（77）. 15. 1－2. おそらく、病で動けないセウェルスはエボラクムにて留まっていた。Birley, *Government*, p. 186.

23）デイヴィッド・J・ブリーズ「世界の縁――帝国最前線とその向こう側」、サルウェイ編前掲書、232頁。

以上が遠征時の大まかな流れである。このセウェルスのブリタンニア遠征は、従来その動機と最終目標とに焦点が当てられ議論されてきた。先述した一次史料の差異もそれに関係している。

第一に遠征の動機についてであるが、ディオによれば、セウェルスの息子であるカラカラとゲタの兄弟は、首都ローマで怠惰な生活を送っており、さらに自身の配下の軍団までもが規律を乱していた。そこでセウェルスは彼らを律するためにブリタンニア遠征を計画した[24]。一方、ヘロディアヌスもセウェルスが息子たちの生活が乱れていたこと、それを厳しい軍律の下に置くことで正そうとしたことに言及している。もっともヘロディアヌスは、二人の息子の状態に関してはおそらくディオの記述を参考にして書いたと考えられている[25]。ところがそれ以降、ヘロディアヌスの記述は、ディオの記述とは異なっていく。ヘロディアヌスは、セウェルスが息子たちを軍律の下で正そうと思ったそもそものきっかけとして、ブリタンニア総督からの援軍の要請があったことを指摘しているのである。総督がセウェルスの遠征を求めた書簡には、北方民族のローマ領土内侵入により、土地は荒廃し、援軍もしくは皇帝の存在が必要だという内容が書かれていたとヘロディアヌスは述べる[26]。バーリーは、このヘロディアヌスの伝える書簡が事実であるとすれば、送り主の総督は、アルフェヌス・セネキオだったと想定している[27]。先にも述べたように、セネキオが総督時には実際、ローマ領土内に北方民族が侵入していたとされており、戦闘があった事もわかっている。ローマの国境線では激しい戦闘が行われていたかもしれない。この事から、書簡を送った可能性がある総督の候補としてセネキオが考えられるのである。

しかし、このヘロディアヌスの記述には問題点がある。総督から皇帝に書簡が送られ、援軍もしくは皇帝自らの遠征を願うという描写は、ヘロディアヌスの記述の、別の皇帝について書かれた箇所にも確認することが出来るのである[28]。加えて、後世に要約されているとはいえ、ディオの記述に書簡への言及がないこともあり、このヘロディアヌスの記述

24）Dio, 76（77）. 11. 1－2.

25）Herodianus, 3. 14. 1.

26）Herodianus, 3. 14. 1－2.

27）Birley, *Septimius Severus*, p. 171.

28）Herodianus, 6. 7. 2.

はあまり重要視されておらず、他の証拠もない以上、その信憑性については、研究者の見解は一致していない。例えばD. マッティングリーは、書簡による援軍、もしくは皇帝の遠征という要望はあったと考えている[29]。対してD. J. ブリーズはヘロディアヌスの記述を一種の常套句表現にすぎないと考えている[30]。またバーリーは、書簡が本物であった可能性を完全に否定はしていないものの、おそらくはヘロディアヌスの創作であったとし、遠征動機に関してはディオの記述に依拠している部分が多い[31]。このように、遠征の動機に関しては一次史料の記述の差異を検証するに留まり、それ以上のことは詳しく議論されていない。

第二に、遠征の最終目標についてだが、これは言い換えるならば、セウェルスがこの遠征において、未征服地であった、現スコットランドに相当する領域の完全征服を意図としていたかどうかという議論である。ディオによれば、セウェルスは自らの征服欲を満たしたがっていて、ブリテン島の全土を支配下に置くことを強く望んでおり、遠征途中で病に倒れながらも、島の北端に近づくまで進軍を止めなかったとされている[32]。ヘロディアヌスは北方民族から和平の申し入れがありながらも、セウェルスがさらなる名声を得るためにその申し入れを拒否し、進軍を続けたと記述しており、セウェルスが領土拡大を目的にしていたということは読みとれるが、領域すべてを支配下に置こうとしていたがどうかには言及していない[33]。先行研究において一次史料の記述、特にディオの記述を全面的に支持しているのがブリーズである。彼はセウェルスが島の完全征服を目論み、事実それを成し遂げる目前まできたものの死去してしまったのだと述べている[34]。一方フルフォードは、要塞や遠征中の野営地の分布図はセウェルスに完全征服の意図がなかったことを示唆しているものの、先に述べた艦隊の規模などからその可能性を完全に否定しきれないともしている[35]。またWilkesはセウェルスが島北部におけ

29）D. Mattingly, *An Imperial Possession, Britain in the Roman Empire, 54 BC-AD 409*, London, 2006, p. 123.

30）ブリーズ「世界の縁」233－234頁

31）Birley, *Septimius Severus*, p. 172.

32）Dio, 76（77）. 13. 3.

33）Herodianus, 3. 14. 1－10.

34）ブリーズ「世界の縁」234頁。

35）フルフォード「新たな出発」94頁；J. Wilkes, Provinces and Frontiers, *The*

るローマの直接支配領域の拡大をどの程度、意識していたにしても、彼の死で全てが取り消されたと述べている。

以上のようにセウェルスの遠征の動機、最終目標については、一次史料の記述を超えての説明はされていない。だが先行研究は一致して、この軍事遠征がブリテン島北方に与えた影響については大きく考えている。フルフォードは遠征の結果、３世紀のその後の期間この属州は平穏に保たれたのだと述べている[36)]。さらにG.ウェブスターは、この遠征によって、長らくローマを悩ませてきたブリタンニア北方の国境問題に、新しい解決策が見出されたという[37)]。彼は、セウェルスの遠征後、国境である「ハドリアヌスの長城」と、その長城を越えて続いていたいくつかの要塞とによって北方に対する警備体制が出来上がっていたとする。このように一般的には、セウェルスの遠征は属州に安定をもたらしたとして評価されている。しかしながらセウェルスが遠征途中で死去したという事実を考えると、彼の遠征は予期せぬ中断を迎えたことになる。セウェルスの死後、この遠征を終わらせたのは息子であるカラカラとゲタであった。特に、兄であるカラカラは、遠征中、常にセウェルスと行動を共にし、210年から行なわれた２度目の遠征では、病に倒れたセウェルスに代り、遠征軍を指揮していた。そのカラカラが遠征をどのように終わらせ、また自身の治世下でいかなるブリタンニア政策を行なったかを考察することで、セウェルスの遠征の本質をも問うことができるのではないか。そこで、次章ではカラカラが皇帝となってからのブリタンニア政策を見ていく。

第２章　カラカラのブリタンニア政策

セウェルスの死を受け、カラカラとゲタはほどなくして遠征を切り上げローマへと帰還した[38)]。その理由は後継者問題にあった。セウェルスが死去した時、カラカラとゲタは共にセウェルスの後継者となりうる地

Cambridge Ancient History, XII, 2nd ed., Cambridge, 2008, pp. 212－268.

36）フルフォード「新たな出発」94頁。

37）G. Webster, Roman *Imperial Army of the First and Second Centuries A. D.*, London, 3rd ed., 1998, pp. 92－93.

38）Herodianus, 3.

位にあった。年長でもあり、早くにカエサルとなっていたカラカラは弟ゲタを殺害し、単独皇帝となることを望んでいた。ディオには、カラカラがセウェルス生存時にもゲタを殺害しようと考えていたこと、しかしながら父、そしてカラカラよりもゲタを支持していた軍団の手前、その考えを実行に移さなかったことが記されている[39]。またヘロディアヌスは、カラカラが兵士の支持を得ようとし、説得に失敗した様子を描いている[40]。これらの記述から、マッティングリーらは、カラカラが自己の地盤固めのため、早々にローマへと帰還しようとしたと考えている[41]。実際、その後ローマへと戻ったカラカラは211年12月25日にゲタを殺害し、単独皇帝となっている[42]。

では、カラカラはブリタンニア遠征をどのように終結させたのか。先述したように彼は、病のセウェルスに代わって遠征軍を指揮していたが、セウェルスの死を受けて北方のマエアタエ族とカレドニイ族と再び協定を結び、ブリタンニアを去った[43]。この協定によってカラカラは、遠征軍が去った後も国境周辺で混乱が起こることのないようにすることには少なくとも成功した。ウェブスターも、この協定により長城以北に対しての抑制効果が維持されていたのではないかと評価してはいる[44]。とはいえ、あくまでウェブスターもセウェルスの遠征こそを重視するのであり、他の先行研究ともどもカラカラがブリタンニアに対して行なった政策の意義には触れない。

しかし、カラカラのブリタンニア政策は北方民族との協定だけではない。その後のカラカラ治世にブリタンニアは二つの属州へと分割された可能性が高いのである。続いてこのブリタンニア分割について詳細に検討し、セウェルスの死の直後の状況と結びつけて考えていく。

セウェルス朝期、ブリタンニアは二つに分割され、それぞれ上部ブリタンニア、下部ブリタンニアとなった。上部ブリタンニアはロンディニ

39）ディオによれば、兵士たちはカラカラよりもゲタの方がセウェルスに似ているという理由で、ゲタを支持していた。Dio, 78. 1. 3.

40）Herodianus, 3. 15. 5.

41）Mattingly, *op. cit.*, p. 124: Birley, *Septimius Severus*, p. 188.

42）D. Shotter, *Roman Britain*, London and New York, 2nd ed., 2004, p. 135.

43）フルフォード「新たな出発」94頁。

44）Webster, op. cit., pp. 92－93.

ウムを中心に、２個軍団を有するコンスル格属州であり、下部ブリタンニアはエボラクムを中心とし、１個軍団が駐屯するプラエトル格属州であった[45]。このブリタンニアの分割に関しては、ヘロディアヌスやディオに記述はあるものの、次に述べる一次史料上の問題から、分割時期が明確ではない。それ故、先行研究では分割時期を、一次史料と碑文史料の双方を用いて絞り込む作業が行なわれてきた。

まずヘロディアヌスは、197年のアルビヌスとの戦闘後にセウェルスが取った政策の一環として、ブリタンニア分割を説明している。彼によるとセウェルスは、戦闘に勝利したのち、ローマへと帰還するより前に、ブリタンニアの総督職を二つに分割したという[46]。このヘロディアヌスの記述では分割時期が197年だと明示されていることになる。実際、概説書などではしばしばこのヘロディアヌスの記述をそのまま用いている場合がある[47]。しかし、セウェルス治世にブリタンニアの総督職を務めた者の経歴や碑文では、セウェルスの治世下ではブリタンニアは依然として一つの属州として記されている[48]。それ故、ヘロディアヌスの記述の信憑性が議論され、現在ではヘロディアヌスが単純に分割の時期を誤って描いたと見なされている[49]。

では、分割の時期はいつなのか。続いてディオの記述を見ていく。ディオが上下ブリタンニアに言及しているのは、『ローマ史』第55巻23章である。セウェルスやカラカラを扱った70巻代後半からは大分巻数を遡っていることがわかる。この箇所でディオは、アウグストゥスの生きた時代の軍団と、自身が生きている時代、つまりセウェルス朝期の軍団との配置の違いなどを記述している[50]。具体的には、アウグストゥスの時代の軍団はセウェルス朝期には19軍団しか残っていないことを挙げ、それ

45）南川高志『海のかなたのローマ帝国』（岩波書店、2003年）、140－141頁。

46）Herodianus, 3. 8. 2.

47）青山吉信編『世界歴史大系　イギリス史1――先史～中世――』（山川出版社、1991年）、38頁。

48）Birley, Government, pp. 333－334.　ブリタンニアを表す呼称として、分割後は複数形、もしくは上下を表わすSuperior、Inferiorが使用されるが、セウェルス治世下ではそれが見られない。

49）Birley, *Government*, pp. 333－336.

50）Dio. 55. 22. 2－6; P. M. Swan, *The Augustan Succession: An Historical Commentary on Cassius Dio's Roman History Books 55－59 (9 B. C.-A. D. 14)*, Oxford, 2004, pp. 158－172.

ぞれが現在どの属州に配置されているかを説明している。その中には、ブリタンニアに駐屯していた3個軍団も含まれており、上部ブリタンニアには第20軍団ウァレリア・ウィクトリクスと第2軍団アウグスタが、下部ブリタンニアには第6軍団ウィクトリクスが駐屯していることが書かれている。

ディオが、上記の『ローマ史』第55巻の軍団配置に関する記述をいつ執筆したのかは不明であり、分割の正確な時期も記されてはいない。バーリーは、同じく記されていた他の軍団配置からブリタンニアの分割時期を絞り込んでいる。ディオはアウグストゥス治世以降に作られた軍団にも言及し、その中で第1軍団アディウトリクスが属州下部パンノニアに配置されていると書いている。しかしこの第1軍団はかつて上部パンノニアに配置されていた。バーリーはこの点に着目し、この配置換えが行なわれたのは、212年からおそくとも217年の間、おそらくは214年と考え、ブリタンニアもこの時期までには分割が行なわれていたと指摘する[51)]。カラカラは父の死後、弟ゲタを殺害したのち単独皇帝となってから217年まで皇帝位に就いていた。以上のことを考えると、ブリタンニアの分割はカラカラ治世に行なわれた可能性が非常に高いということになる。他の先行研究は、本格的検討はせず、ヘロディアヌスの記述の信憑性の低さから、分割時期が特定できないものの、おそらくカラカラ治世であるとしているが、一次史料と碑文史料とを併せて時期を特定しようとしているバーリーの説はおおむね正しいように思われる[52)]。

分割がカラカラ治世に行なわれたとして、このブリタンニアに対する政策はどのような意図を持って行なわれたのだろうか。その理由としてバーリーは、弟ゲタ殺害に対して、ブリタンニアの軍団が反抗的な反応をしたからではないかと述べている[53)]。一方フルフォードは、この分割には、かつて駐屯軍によって擁立されたアルビヌスの出来事を繰り返さ

51）Birley, *Government*, p. 333.

52）例えば、Mattinglyは213年までに分割が行なわれたとしている。Mattingly, *op. cit.*, p. 126; Toddは分割はセウェルス死後、カラカラ治世であろうとしている。M. Todd, *Roman Britain*, Oxford, 3rd ed., 1999, p. 155；またCampbellは明確な事はわからないが分割は211年から220年頃の間に行われたとしている。B. Campbell, The Severan dynasty, *The Cambridge Ancient History*, XII, 2nd ed., Cambridge, 2008, pp. 1－27.

53）Birley, *Government*, p. 336.

ないように、駐屯軍に対する責任を分割する狙いがあったとしている[54]。セウェルスの遠征の動機や最終目標と同様に、様々な見解が出されている。

筆者はここで、上下ブリタンニアの駐屯軍に着目したい。バーリーはカラカラが分割に先立ち、軍団の配置換えを行なったと指摘している。彼によれば、第20軍団ウァレリア・ウィクトリクスは、セウェルス治世下には後に下部ブリタンニアとなる地域に配置されていた。ところがその後カラカラ治世に上部ブリタンニアの地域へと移動させられた[55]。その結果、２個軍団を有する上部ブリタンニアはコンスル格属州に、１個軍団しか有しない下部ブリタンニアはプラエトル格属州となったという。この配置換えに関しても何故行なわれたのかは明らかではなく、バーリーはこの配置換えを、あくまで属州の分割時期を特定するための議論の中で取り上げているのみであり、その後に行なわれた分割の性格と結びつけて考えてはいない。しかし、この配置換えが属州分割のために意図して行なわれたとすると、フルフォードが主張する「駐屯軍に対する責任の分割」に加えて、上下の属州それぞれにおける駐屯軍の役割をきっちりと明確にする目的もあったのではないだろうか。先述したようにカラカラ治世始めに北部国境では、警備体制が出来上がっていた可能性がある。それを維持するためにも北方に位置する下部ブリタンニアの注意は常に国境に向けられている必要があった。つまり下部ブリタンニアには防衛に必要な１個軍団のみが駐屯し、国境維持に専念していたのではないだろうか。実際に下部ブリタンニアでは、セウェルスの遠征以降も、北方の要塞を中心とし、様々な建築物が再建及び修築されており、それは213年から225年に及んだ事がわかっている[56]。

一方で島南部に位置する上部ブリタンニアには下部ブリタンニアとは異なる役割のため、２個軍団が設置された。一つは下部ブリタンニアが北方に専念できるように、上部ブリタンニアを平穏な状態に保っておくことである。すでに長らくローマ領であり続けた地域からなる上部ブリ

54）フルフォード「新たな出発」、94頁。

55）Birley, *Government*, p. 181. 上部ブリタンニアではイスカ（ケーリオン）、デウァ（チェスター）に各一個軍団が、下部ブリタンニアでは、エボラクム（ヨーク）に一個軍団が駐屯し、その他多くの補助軍団が防衛を支えていた。南川「海のかなたのローマ帝国」、140頁。

56）Todd, *op. cit.*, pp. 157－158.

タンニアではそれはさほど難しい問題ではなかっただろう。そのためには１個軍団の兵力で事足りたかもしれない。しかし、上部ブリタンニアにはもう一つの役割が設定されていたのではないだろうか。それがブリタンニア内部ではなく、大陸で何かしらの軍事衝突があった際に、援軍を送る供給地としての役割である。

時代は遡るが、１世紀末、フラウィウス朝の皇帝ドミティアヌスは、ライン・ドナウ方面でおきたローマと国境外部族との戦闘へ援軍を出すようにブリタンニアに命じている[57]。最終的には当時ブリタンニアに駐屯していた軍団の内、第２軍団アディウトリクスが大陸への援軍としてブリタンニアから撤退していく事態となった。このためブリタンニア北方ではそれまで維持していた前線の放棄を余儀なくされたのである。さらにフルフォードは160年代の「アントニヌスの長城」放棄と、当時の皇帝マルクス・アウレリウスがドナウ川で直面していたマルコマンニー戦争との関係を示唆している。つまり「アントニヌスの長城」の維持が難しいほど、人的資源がブリタンニアから大陸へと送られた可能性があるというのだ[58]。

このように、大陸で問題が起きた際、ブリタンニアは兵力の供給源として機能し、そのしわ寄せは常にブリテン島北方の国境地帯へ来ていた。しかし、上部ブリタンニアに２個軍団を配置することで、例えそのうちの１個軍団が大陸へと送られても、残りの兵力で属州内の平穏を護ることが可能であっただろう。それにより下部ブリタンニアの駐屯軍が大陸での有事や隣接する上部ブリタンニアの情勢に左右されることなく、北方警備に専念できる状況が生まれたのではないだろうか。

先述したように先行研究はセウェルスの行なった軍事遠征こそが、その後の１世紀間のブリタンニアの安寧をもたらしたのだとしている。例えばウェブスターは、平穏状態が保たれた理由として、セウェルスの行なった残虐な遠征が北方民族に恐怖心を与え、反乱の抑止力になってい

57）85年にゲルマニアへ、その後90年前半までに第２軍団アディウトリクスがローマ領に侵入したダキア人との戦闘のため送られた。フルフォード「新たな出発」61－62頁。Shotterは、スコットランドの要塞跡から出土したコインから、第２軍団アディウトリクスの移動は87年であるとしている。D. Shotter, *Roman Britain*, London and New York, 2nd ed., 2004, p. 26.

58）フルフォード「新たな出発」、91頁。

たのだと指摘している[59]。しかし、果たしてそうだろうか。セウェルスの遠征中、北方民族は一度セウェルスと結んだ協定を破棄し、ローマに対して再反乱を起こした。それ故に210年に再び遠征が行なわれたのである。ここからは北方民族への抑止力として、遠征の残忍さがそれほど大きな役割を持っていた訳ではないことがわかる。もちろん彼の行なった遠征の影響は小さくはなかったであろうが、セウェルス亡き後、遠征を終わらせ、北方民族との平和を作りだしたのはカラカラであった。さらには、カラカラの行なった軍団の再配置と属州分割こそが、上下ブリタンニアの役割を明確にし、その後のブリテン島における安定の時代の基礎となったのである。

おわりに

本論では、セプティミウス・セウェルスが治世末に行ったブリテン島北部への遠征から議論を始め、彼の後を継いだカラカラの統治政策にまで考察を進めた。これまでブリタンニアの平穏状態の基礎を作ったのはセウェルスの遠征だと考えられてきたが、本論は、カラカラの行ったブリタンニア政策こそが、３世紀における、この属州の安定した状況を生み出したのだという結論に至った。

ブリタンニアから去った後、カラカラは帝国東部への関心を強めていった。そこでフルフォードは、帝国東方での出来事によって西部の影が薄れてしまい、とくにブリテン島は、軍事的観点からは、いわば「取り残された場所」となり、もはや帝国内でさほど重要な関心を示されなくなったとさえ述べる[60]。

しかし、セウェルスの行った遠征を終わらせ、属州分割という措置を採ったカラカラの行動からは、ローマ中央によるブリタンニアへの積極的な働きかけが見て取れるのである。確かにカラカラの関心は東方にあった。だが、東方へと関心を向け続けるためには、西部の安定が重要だったのである。そのために取られた政策こそが、その後約１世紀の間続く属州ブリタンニアの安定をもたらしたのである。カラカラの統治政

59）Webster, op. cit, pp. 92－93.

60）フルフォード「新たな出発」、94－95頁。

策は一般的に高く評価されないが、少なくとも属州ブリタンニア統治に関しては再評価する必要があるのではないだろうか。